奈良・平城京東市跡推定地

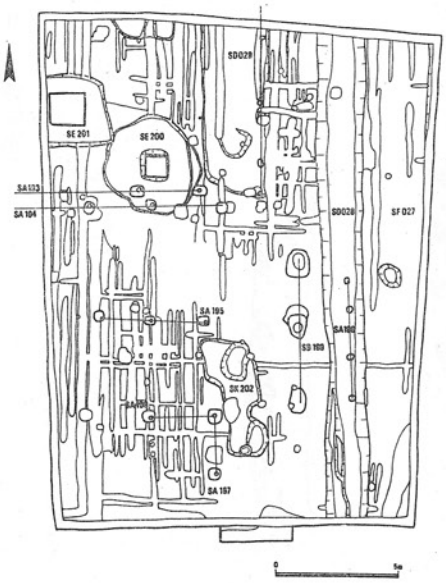
1 所在地　奈良市杏町（からもものちょう）
2 調査期間　一九九一年（平3）一〇月～一一月
3 発掘機関　奈良市教育委員会
4 調査担当者　三好美穂
5 遺跡の種類　都城跡
6 遺跡の時代　奈良時代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

一九八一年度から開始した平城京東市跡の範囲確認調査も一一年目を迎え、調査次数も第一二次となった。今回の調査地は、平城京の条坊では、左京八条三坊五・六・十一・十二坪に比定される東市跡の北西坪、六坪にあたる。この調査で検出した主な遺構は、市域推定地内の中央を南北に通る東三坊坊間路の一部とその西側溝、築地痕跡、門、掘立柱塀五条、井戸二基、土坑などである。門及び東三坊坊間路を検出したことにより、平安京の市と同様に、市域推定地内は道路で一坪ごとに区画されていた可能性が高くなったといえる。

（桜　井）

木簡が出土したのは、六坪内で検出した井戸SE二〇〇からである。東西四m、南北四mの平面楕円形の掘形をもつ井戸で、検出面からの深さ三・二mを測る。二段掘りされた掘形内に井籠組の井戸枠が据えられていた。井籠組の板材は、長さ約一〇〇cm、幅一六～四〇cm、厚さ二～五cmで、目違枘で組まれた内法は一辺九四cmである。底から九段分が残存していた。

木簡五点は、奈良時代後半の特徴をもつ土師器・須恵器を始め、墨書土器・木履・漆器皿・横櫛・斎串とともに出土した。墨書土器



検出遺構平面図

は全部で二九点出土し、その内訳は「小」字様のもの二四点、「鯛」二点、「八番」「袖」がそれぞれ一点ずつ、不明一点である。

井戸SE二〇〇から多量の遺物とともに墨書土器や木簡などの文字資料が出土したことは、遺跡の性格を考えるにあたり重要な手がかりとなるだろう。

8　木簡の釈文・内容

(1)　□〔張張カ〕□張張□　　091

□〔浄カ〕、、、、□

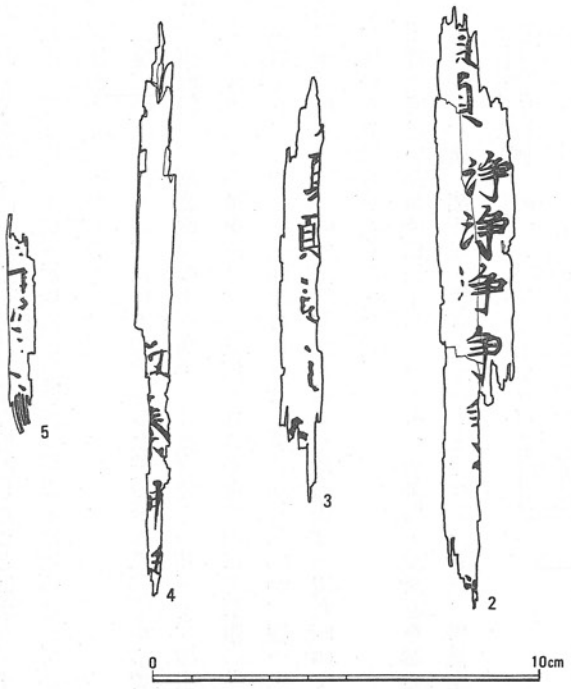
(2)　浄浄浄争□〔争カ〕□　□　　091

(3)　□□□□□□　　091

(4)　□秦□□　　091

(5)　□□□□□　　091

(1)～(3)は習書木簡の削屑である。これらは筆跡などから同じ木簡の削屑である可能性が考えられる。(2)の左側第一、二字、および(3)の第二、三字は「頁」（おおがい）が読みとれるが、偏の有無は不明である。(4)(5)も削屑である。それぞれ四字分、五字分の字数が確認できるが、内容等は不明である。



9　関係文献

奈良市教育委員会『平城京東市跡推定地の調査X―第12次発掘調査概報―』（一九九一年）

（三好美穂）